



# Event Summary Report

# ROAD TO SILICON VALLEY

2020 Oct 20,21,22





## 概要

2018年の第1回開催に続き、世界最高峰のスタートアップ養成スクールY Combinator（以下YC）とシリコンバレー・ジャパン・プラットフォーム（SVJP）の共同で2020年10/20（火）・10/21（水）・10/22（木）の3日間、本場シリコンバレーのスタートアップエコシステムとYCのプログラムを体感できる貴重な機会としてオンラインにてスタートアップ・イベントを開催いたしました。

AirbnbやDropboxなど、世界で注目を集めるスタートアップを多数輩出するYC。今回はそのパートナー陣とYCのスタートアップ育成プログラムを卒業した現役起業家を招待し、ディープテックを切り口に日本から海外を目指して躍進する起業家やそれを支えるVCを交え、日本のスタートアップがグローバルな舞台でいかにチャレンジできるのかを議論しました。

## 本イベントの目的

本イベントは、日本のスタートアップをYCをはじめとするシリコンバレー、ひいては世界のネットワークにつなげ、日本発グローバルスタートアップの創出を支援・促進するほか、次世代の起業家発掘を行うことを目的としています。

---

## INDEX

---

タイムテーブル .....	2
登壇者 .....	3
セッションレポート .....	4
The Role of the University in the Innovation Ecosystem.....	5
How to Build a Billion Dollar Company .....	9
Advice for Deep Tech and Biotech Founders.....	12
YC Community against Pandemic.....	15
Keynote Session.....	18
Technology and Entrepreneurship from Japan Contributing to Our Society.....	21
協賛・協力 .....	24

# タイムテーブル

## Day 1

"How Y Combinator Works"	9:30-10:10	Kat Mañalac (YC Partner)
"Advice for Deep Tech and Biotech Founders"	10:15-10:45	Uri Lopatin (YC Partner)
*"The Role of the University in the Innovation Ecosystem"	10:50-11:50	Mod: 佐藤 輝英 (BEENEXT ファウンダー & CEO) Kat Mañalac (YC Partner) 笠原 博徳 (早稲田大学 副総長) 川原 圭博 (東京大学 大学院工学系研究科 教授) 木谷 哲夫 (京都大学 産官学連携本部 IMS 起業・教育部長、特定教授) 坪田 一男 (慶應義塾大学 医学部眼科学教室教授)
"Reflection & AMA from Online"	12:00-12:40	Mod: 馬田 隆明 (東京大学 FoundX ディレクター) 石渡 祥之佑 (Mantra 株式会社 代表取締役) 清水 信哉 (エレファンテック株式会社 代表取締役社長)

## Day 2

*"How to build a billion-dollar company"	10:05-10:35	Kat Mañalac (YC Partner)
*"Advice for Deep Tech and Biotech Founders"	10:40-11:40	Mod: Uri Lopatin (YC Partner) Ivana Djuretic (YC Alumni, Asher Bio ファウンダー) Joey Azoifeifa (YC Alumni, Arpeggio Bio ファウンダー / CEO)
*"YC Community against Pandemic"	11:45-12:30	Mod: Jared Friedman (YC Partner) Aaron Morris (YC Alumni, PostEra CEO) Uri Lopatin (YC Partner)
"Interactive Q&A session"	12:30-13:00	Kat Mañalac (YC Partner) Uri Lopatin (YC Partner) Aaron Morris (YC Alumni, PostEra CEO) Ivana Djuretic (YC Alumni, Asher Bio ファウンダー) Joey Azoifeifa (YC Alumni, Arpeggio Bio ファウンダー / CEO)
*"Keynote Session"	14:05-14:50	Mod: 鎌田 富久 (TomyK Ltd.株式会社 代表 / ACCESS 共同創業者) 鍵本 忠尚 (株式会社ヘリオス 代表執行役社長 CEO) 芳川 裕誠 (Treasure Data 創業者)
"The Hard Things About Deep Tech"	14:55-15:50	Mod: 永田 暁彦 (株式会社ユーグレナ 取締役副社長 / リアルテックファンド 代表) 東 志保 (株式会社 Lily MedTech 代表取締役) 粕谷 昌宏 (株式会社メルティン MMI 代表取締役) 関水 康伸 (株式会社 PROVIGATE 代表取締役 CEO) 羽生 雄毅 (インテグリカルチャー株式会社 CEO)
"Present and Future of Deep Tech"	15:55-16:35	Mod: 鮫島 昌弘 (ANRI 株式会社 パートナー) 丸 幸弘 (株式会社リバネス 代表取締役 グループ CEO) 盛島 真由 (Beyond Next Ventures 株式会社 執行役員)
*"Technology and Entrepreneurship from Japan Contributing to Our Society"	16:40-17:30	MOD: 辻 庸介 (株式会社マナーフォワード 代表取締役社長 CEO) 出雲 充 (株式会社ユーグレナ 代表取締役社長) 宮田 裕章 (慶應義塾大学 医学部 教授)

## Day 3

"Office Hours" (Closed)	9:00-11:00	9 社 Kat Mañalac (YC Partner) Uri Lopatin (YC Partner)
"Office Hours" (Open)	11:00-12:00	3 社 Kat Mañalac (YC Partner) Uri Lopatin (YC Partner)
Ask Me Anything hosted by Entrepreneurs	9:00-11:00	芳川 裕誠 (Treasure Data 創業者) 杉江 理 (WHILL 株式会社 代表取締役社長 CEO) 福山 太郎 (Fond Technologies, inc. CEO) 横川 毅 (Alpaca Co-Founder and CEO)

\*セッションレポート有り

# 登壇者

Alphabetical by Last Name



**Y** Jared Friedman  
Y Combinator  
パートナー



**Y** Uri Lopatin  
Y Combinator  
パートナー



**Y** Kat Mañalac  
Y Combinator  
パートナー



佐藤 輝英  
BEENEXT Capital Management Pte. Ltd.  
ファウンダー & CEO



辻 庸介  
株式会社マネーフォワード  
代表取締役社長 CEO



山岸 広太郎  
株式会社慶應イノベーション・  
イニシアティブ  
代表取締役社長



Joey Azofeifa  
Arpeggio Bio  
ファウンダー/CEO



東 志保  
株式会社 Lily MedTech  
代表取締役



Ivana Djuretic  
Asher Bio  
ファウンダー



福山 太郎  
Fond, Inc.  
CEO



羽生 雄毅  
インテグリアルチャー株式会社  
CEO



出雲 充  
株式会社ユーグレナ  
代表取締役社長



石渡 祥之佑  
Mantra 株式会社  
代表取締役



鍵本 忠尚  
株式会社ヘリオス  
代表執行役社長 CEO



鎌田 富久  
TomyK Ltd.  
TomyK Ltd. 代表



笠原 博徳  
早稲田大学  
副総長



粕谷 昌宏  
株式会社メルティン MMI  
代表取締役



川原 圭博  
東京大学  
大学院工学系研究科 教授



木谷 哲夫  
京都大学  
産官学連携本部 IMS 起業・  
教育部長、特定教授



丸 幸弘  
株式会社リパネス  
代表取締役グループ CEO



宮田 裕章  
慶応義塾大学  
医学部 教授



盛島 真由  
Beyond Next Ventures 株式会社  
執行役員



Aaron Morris  
PostEra  
CEO



永田 暁彦  
株式会社ユーグレナ  
取締役副社長  
リアルテックファンド 代表



鮫島 昌弘  
ANRI 株式会社  
パートナー



関水 康伸  
株式会社 PROVIGATE  
代表取締役 CEO



清水 信哉  
エレファンテック株式会社  
代表取締役社長



杉江 理  
WHILL 株式会社  
代表取締役社長 CEO



坪田 一男  
慶應義塾大学  
医学部眼科学教室 教授



馬田 隆明  
東京大学  
FoundX ディレクター



横川 毅  
Alpaca  
Co-Founder and CEO



芳川 裕誠  
Treasure Data  
創業者



# セッションレポート

## The Role of the University in the Innovation Ecosystem

### イノベーション・エコシステムを支える大学の役割

Day 1 10:50-11:50

起業やイノベーションのエコシステム創出において、優秀な人材や多くの知的財産を有する大学が果たす役割は大きい。本セッションでは、日本を代表する4つの大学からイノベーション領域に携わる担当教授を招き、YCパートナーのキャット・マニャラック氏と、大学における起業家育成の取り組みや課題について意見交換を行った。モデレーターはBEENEXTのCEOで、SVJP エグゼクティブ・コミッティーメンバーを務める佐藤輝英氏が務めた。

#### 学生・教員・卒業生を結びつける

早稲田大学は、ソニーの井深大氏やユニクロの柳井正氏、メルカリの山田進太郎氏など、数多くのカリスマ経営者を輩出してきたことで知られる。

近年は、「早稲田オープン・イノベーション・エコシステム」構想を打ち出し、スタートアップに提携VCや会計・法律などの専門家を紹介したり、研究室と企業の共同研究を促進し



オープン・イノベーション・エコシステム構想について語る笠原教授（早稲田大学）

たりすることで、エコシステムの活性化を図っている。

また2020年6月には、キャンパスの一角に研究戦略立案、産学連携、知的財産管理、インキュベーションの4つの機能を統合した全学的な研究支援施設「早稲田大学リサーチイノベーションセンター（RIC）」を開設。笠原博徳氏は「早大の周りには多くのベンチャー企業があるが、それをつなぐネットワークがなかった。RICを中心に学生、教員、卒業生を結びつけ、産学連携を深めてスタートアップのエコシステムを促進していきたい」と話す。

笠原氏はプレゼンの最後に、日本の起業家がオンラインでもYCに参加できるようにしてほしい、とマニャラック氏に提案した。これに対してマニャラック氏は、YCがシリコンバレーで開催している本体プログラムとは別に、オンラインで常時提供している10週間の無料



講座「スタートアップスクール」を紹介。「多くの大学で起業入門の教材としても使われており、講座修了後にYCに応募する学生も多い」として積極的な参加を呼びかけた。

### 「技術力」と「市場」のギャップ

東京大学は、1998年にTLO（技術移転機関）を発足させて以来、400社以上の大学発ベンチャーを輩出し、うち17社がIPOを果たしている。時価総額の上位5社（ペプチドリーム、ミクシィ、パークシャテクノロジー、ユーグレナ、リプロセル）を合計すると約1兆円近い。

学内のインキュベーション施設をはじめ、メインキャンパスがある文京区本郷界隈には多くのスタートアップが集まっており、その一帯は「本郷バレー」と呼ばれる。川原圭博氏は「先輩や友人が成功している姿を見て、起業家になりたいという学生が増えている」と語る。

一方で、川原氏は「一般に大学発のスタートアップの技術レベルは高いが、小さな市場にフォーカスしがちであり、VCが期待するよう



アカデミックに眠る技術の可能性を紹介する川原教授（東京大学）。

な大きな成長が見込みにくい」と課題を指摘。こうした技術力と市場のギャップを埋めるには、まずは学生を指導する立場にある教員たちに起業の考え方や仕組みをより深く理解してもらうための研修プログラムが必要だとの考えを示した。

マニラック氏もこれに賛同し、「アメリカにもジョージア工科大学のように、優秀なエンジニアが多いのに起業家が少ない大学もある」とコメント。「教育機関として何を目指すのか、どんな人材を世の中に輩出したいのかは大学によって大きく異なる。それぞれのミッションに応じて生み出される大学のカルチャーは、現場の教員にも浸透していく。大学の先生が『起業もキャリアの選択肢の一つ』だと学生たちに伝えることで、起業家を志す学生も増えるはずだ」と語った。



海外展開への障壁をいかに下げるかが課題だと話す木谷教授（京都大学）。

### 実務経験のある人材を招聘

「教員への教育は大切だが簡単ではない」という見方を示すのは、京都大学の木谷哲夫氏だ。同大では、代わりに外部から投資家や起業家など実務経験のある人材を講師として積極的に招くことで、起業エコシステムの活性

化に努めている。

京大も東大同様、自前のベンチャーファンドをもち、同大に属する研究者の知的成果を活用するスタートアップへ出資その他の支援を行っている。

教育プログラムとしては、学部・院生向けに12の起業・イノベーション関連講座を開き、昨年は約700人が参加。また学内にインキュベーション施設のほか、3DプリンターやVRデバイスなどを用いたプロトタイプ制作ができる工作工房も24時間開放している。

こうした取り組みが成果を上げ、2014～19年に同大から30社以上のスタートアップが誕生し、そのうち2社がエグジットを果たした。

順調に見える京大だが、木谷氏は「シリコンバレーの経験がある日本語を話せるメンターを見つけるのが難しい」と悩みを打ち明ける。

これに関連して、モデレーターの佐藤氏は「共同創業者の一人に外国人や英語を話せる人を選ぶなど、スタートアップ内のダイバーシティを増やすことで、海外展開のハードルが低くなる」と語った。

### 保守的な医学部にも変化

4人目のプレゼンターである慶應義塾大学の坪田一男氏は、2015年の学校教育法の改正を機に、大学の責務として従来の教育・研究に加えて、直接的な社会貢献（＝イノベーション）が求められるようになったと説明した。そして一般に医学部は保守的な組織であるとの認識を示しながらも、自身が昨年開催した東京



課題として大学の教員意識改革を挙げ、ディスカッションを盛り上げる坪田教授（慶應義塾大学）。

証券取引所の見学ツアーに多くの医学部生が参加したことに触れ、「医学部にも確実に新しい波がきている」と指摘した。

慶應義塾大学医学部では、坪田氏らの働きかけにより2019年5月に「ベンチャー協議会」が発足（現在スタートアップ13社が加盟）。また修士課程に「アントレプレナー育成コース」が開講されたり、医学部主催のビジネスコンテスト「健康医療ベンチャー大賞」が開催されたりするなど、徐々に改革が進んでいる。

坪田氏は「大学教員の中には、ビジネスでお金を稼ぐことを『悪』だとみなす風潮も根強い」と指摘し、「保守的な考えの教員をどうやって変えられるか」とマニャラック氏に質問した。マニャラック氏は「カルチャーを変えるのは簡単ではない」とした上で、「起業するのは、欲があるからではなく、社会にインパクトを与えたいからです。10億人の人生を変えるようなビジネスをしたいという情熱が先で、お金はあくまで結果です」と述べた。

続く自由討論の時間では、早稲田大学の笠原氏が「保守的な文化を変えるには成功事例が必要だ。学生や教授が起業して社会を変えていけば、日本の状況も少しずつ変わっていく

だろう」という見方を示した。

最後に佐藤氏は全体の議論を振り返り、「YC は卒業生のネットワークが強力。日本の大学でも起業した卒業生のネットワークが広がれば、素晴らしいエコシステムができるはずだ」と語った。

各大学の取り組みが実を結び、日本の大学発ベンチャーがグローバルに成功を収める日も近いと確信させるセッションとなった。



佐藤 輝英 (Teruhide Sato)、BEENEXT Capital Management Pte. Ltd ファウンダー & CEO / 一般財団法人アジア・パシフィック・イニシアティブ 理事 / SVJP エグゼクティブ・コミティーメンバー。慶應義塾大学総合政策学部卒業。在学中からソフトバンクにて、米国の EC 決済サービス会社サイバーキャッシュ（現ペリトランス）の日本法人立ち上げに参画。2000 年にネットプライス（現 BEENOS）の代表に就任し、2004 年に同社を東証マザーズ上場へ導く。2011 年にアクセラレーター「Open Network Lab」を共同設立。2015 年、シンガポールを拠点とする VC の BEENEXT を立ち上げ、主に新興国のネット企業への投資を行う。



キャット・マニャラック (Kat Mañalac)、Y Combinator パートナー。米ベイエリアで育ち、名門ノースウェスタン大学を卒業（コミュニケーション学専攻）。米出版大手コンデナストの WIRED 編集部にて約 4 年間勤務し、ブランド戦略を担当。「2010 年の最優秀マーケター」賞などを受賞。その後、reddit の共同設立者アレクシス・オハニアン のチーフスタッフを務めたことがきっかけでスタートアップの世界へ。2013 年より YC のパートナーとして、毎年 400 社以上のスタートアップ支援に携わっている。



笠原 博徳 (Hironori Kasahara)、早稲田大学 副総長 情報理工学科 教授。1985 年、早稲田大学大学院理工学研究科電気工学専攻修了（工学博士）。カリフォルニア大学バークレー校客員研究員などを経て、現在、早稲田大学基幹理工学部情報理工学科教授。また同大副総長として、アントレプレナーシップ、知財、産官学連携を含むリサーチイノベーションを統括する。IEEE Computer Society 会長や文部科学省情報科学技術委員会など、国内外の学会や省庁、財団など 260 以上の委員を歴任してきた。文部科学大臣表彰科学技術賞、Spirit of IEEE Computer Society Award など受賞歴多数。



川原 圭博 (Yoshihiro Kawahara)、東京大学 大学院工学系研究科 教授。2005 年に東京大学大学院情報理工学系研究科修了（情報理工学博士）。米ジョージア工科大学客員研究員、MIT メディアラボ客員教員、科学技術振興機構（JST）の戦略的創造研究推進事業「Erato」の研究総括などを経て、2019 年より現職。情報機器へのエネルギー供給を可能とするエネルギーハーベスティングや無線電力伝送が主な研究テーマ。また自身の研究室から生まれたスタートアップ 2 社（エレファンテック、SenSprout）の技術アドバイザーを務めるなど、新技術の商業化にも取り組む。



木谷 哲夫 (Tetsuo Kitani)、京都大学 産官学連携本部 IMS 起業・教育部長（特定教授）。マッキンゼー・アンド・カンパニーにてアソシエイト・プリンシパルを務めた後、メリルリンチ・キャピタルマーケット（NY）、日本興業銀行、アリックス・パートナーズを経て、2007 年より京都大学産官学連携本部イノベーション・マネジメント・サイエンス（IMS）寄附研究部門教授として、起業家教育を担当。2020 年より現職。東京大学法学部卒、シカゴ大学大学院で政治学修士号、ペンシルバニア大学ウォートンスクールで MBA を取得。主な著書に『成功はすべてコンセプトから始まる』など。



坪田 一男 (Kazuo Tsubota)、慶應義塾大学 医学部眼科学教室 教授 / 株式会社坪田ラボ 代表取締役。慶應義塾大学医学部卒業。ハーバード大学で角膜クリニカルフェロー修了。角膜移植、ドライアイ、屈折矯正手術の世界的権威として知られる。2015 年に近視、ドライアイ、老眼への革新的なソリューション開発を目指して慶應義塾大学医学部発のベンチャー、坪田ラボを立ち上げた。iPS 細胞を用いた再生医療や長寿遺伝子など最先端の予防医学研究にも取り組む。慶應義塾大学大学院経営管理研究科で EMBA 取得。近視研究会世話人代表。日本抗加齢医学会前理事長。ドライアイ研究会初代代表世話人。

## How to Build a Billion Dollar Company

### 「10億ドル企業」を作る方法

Day 2 10:05-10:35

本イベント2日目の午前中に行われた最初のセッションは、「10億ドル企業を作る方法 (How to Build a Billion Dollar Company)」と題して、YCパートナーのキャット・マニャラック氏が、成功するスタートアップの秘訣について約30分のレクチャーを行った。マニャラック氏は最初にYCの特徴を手短かに説明し、その後、10億ドル企業を作るのに欠かせない3つのポイントを挙げた。

#### 最も成功しているアクセラレーター

YCは2005年の創設以来、2500社以上のスタートアップを輩出してきた。YC出身企業のリストを見ると、AirbnbやDropbox、Stripe、Instacart、Docker、Quoraなど、錚々たる企業名が並ぶ。出身企業の時価総額（企業価値）



日本のオーディエンスに向けて、YCのプログラムを卒業し世界で活躍するスタートアップのエッセンスを熱く語るYCパートナーのマニャラック氏。

を合計すると2000億ドルを超えるという。

日本からはこれまでFond（福利厚生）とAlpaca（フィンテック）の2社がYCを卒業しており、Alpacaはつい最近シリーズAの調達を完了したばかりだ。

一般にVCから出資を受けたスタートアップであっても75%が倒産と言われていたが、YCの場合は出身企業の70%が今も事業を継続していることから、YCの圧倒的なスタートアップ育成力がうかがえる。

ではYC出身の成功企業に見られる3つの共通点とは何か。

#### 1. アイデアが明確である

最初にマニャラック氏が指摘したのは、事業内容をなるべく簡潔かつ明確に説明する能力だ。

YC卒業時のDemo Dayで起業家に与えられる発表時間はわずか2分間。当日は200社以上がプレゼンを行うため、投資家にアピールするには、シンプルでわかりやすいメッセージが重要となる。

「アイデアが明確だと自然に口コミで広がっ

ていくため、マーケティングなどに余計なコストがかかりません。UberやTikTokなども、最初は口コミでユーザーが増えていきました」と、マニャラック氏は語る。

具体的なコツとして、AirbnbやBoom（超音速旅客機）が実際のプレゼンで用いたキャッチフレーズを紹介しつつ、「何をする会社かを最初に一文で述べる」「流行りの言葉（ノウハウ、シナジーなど）は使わない」「冗長な説明は避ける」などのポイントを紹介した。

## 2. 数字にフォーカスしている

参加スタートアップは3カ月のプログラム期間中、「プロダクト開発」と「ユーザー開拓」の二点のみに集中し、採用や講演など他の活動は一切禁止される。

そこでゴールとなるのが「数字」だ。各スタートアップは一つの数値達成を目標に3カ月間全力を傾けると、マニャラック氏は言う。

「YCパートナーと相談しながら、毎週10%成長が可能な数字をはじめに取り決めます。ソフトウェア企業の場合は売上やユーザー数などが一般的ですが、ハードテック系やバイオテック系の企業の場合は、必ずしもそうはいかないので、LOI（基本合意書）など別のゴール

を設定することが多いです。たとえば、BoomはDemo Dayの前に、宇宙旅行企業ヴァージン・ギャラクティックなどから50億ドルのLOIを獲得することに成功しました」

## 3. 大きなビジョンがある

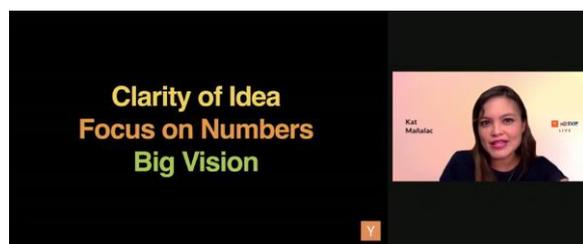
フォーカスする数字を設定したら、次に起業家が考えるべきは、「その数字をどこまで最大化できるか」だ。マニャラック氏は次のように話す。

「どうすれば自分たちのプロダクトやサービスをスケールできるか。一つは、起業家が自分自身を信じることです。YCではどんなアイデアがヒットするかを予測するようなことはしません。私たちが予測するのは、起業家やチームがどれだけの強い意志をもって10億ドル企業の創出に取り組めるかです」

YCへ応募する起業家はもともと大きなビジョンを持っていると思われるが、YCではそのビジョンをさらに「極限」にまでもっていくよう指導を行っている。たとえばプログラム期間中には、「もし全世界の人が自社のテクノロジーを手にしたら何ができるか」といったシナリオを起業家たちに考えさせるのだという。

## 圧倒的なYCのネットワーク

上記1〜3の点を踏まえ、マニャラック氏はYCがこれまで多くの優れたスタートアップを輩出できた理由として、卒業生のもつ強いネットワークを挙げた。



「YCが他のアクセラレーターと大きく異なる点は、全世界に5000人以上の起業家のネットワークをもっていることです。創設者のポール・グレアムやジェシカ・リビングストンは、2005年にRedditやLooptなど第1期のスタートアップを輩出して以来、とくにネットワーク作りに力を入れてきました。YCには卒業生同士が気軽に意見交換できるSNS『Bookface』をはじめ、このつながりを促進するためのさまざまなメカニズムがあります」

残念ながら、そのネットワークに日本人起業家はまだ少ない。YCに参加する日本の起業家が増えることは、日本のスタートアップ業界にとっても、そしてまたYCにとってもプラスとなる。マニャラック氏は最後に今後のプログラム開催予定に触れ、「少しでもYCに興味がある人はぜひ応募してほしい」と日本の参加者らに呼びかけた。



キヤット・マニャラック (Kat Mañalac)、Y Combinator パートナー。米ベイエリアで育ち、名門ノースウェスタン大学を卒業（コミュニケーション学専攻）。米出版大手コンデナストの WIRED 編集部で約4年間勤務し、ブランド戦略を担当。「2010年の最優秀マーケター」賞などを受賞。その後、redditの共同設立者アレクシス・オハニアンの子供スタッフを務めたことがきっかけでスタートアップの世界へ。2013年よりYCのパートナーとして、毎年400社以上のスタートアップ支援に携わっている。

## Advice for Deep Tech and Biotech Founders

### ディープテック起業家たちへのアドバイス

Day 2 10:40-11:40

約1時間の本セッションでは、モデレーターであるYC客員パートナーのロパティン氏が、ともに2019年夏季プログラムの卒業生であるアゾフェイファ氏とジュレティッチ氏の二人に、起業に至る経緯から、YCのプログラムを通して得たこと、そしてYC卒業後の歩みなどについて詳しく話を聞いた。

#### YCで得られた2つのスキル

アゾフェイファ氏が率いるアルペジオ・バイオは、機械学習とRNAシーケンス（遺伝子発現解析技術）を用いて、ガン細胞の増殖に関わるタンパク質である転写因子（TF）に作用する新薬を開発している。

機械学習を用いて膨大なゲノムデータを処理できるアルゴリズムの研究をしていたポストドク研究員時代に、製薬会社と仕事をすることがきっかけで、昨年、自らバイオ企業を立ち

上げた。創業当初からすでに顧客がいて、売上も立っていたと語る。

そんなアゾフェイファ氏は、YCで得た学びとして「コミュニケーション」と「ネットワーク」の2点を挙げた。

「以前は投資家に事業内容を聞かれても、『TFの阻害薬を作る』という簡単な説明すらできませんでした。僕のように研究畑出身の人間は物事を複雑に考えるのが得意な反面、シンプルに説明するのが苦手。YCでは誰にでもわかるよう、明確かつシンプルに伝えることを鍛えられるので、ディープテック分野の起業家にはとてもプラスになると思います」

またネットワーク作りに関しても、「理系博士の起業家は概して人脈作りが不得手。でもYCでは毎週いろんな起業家や投資家などと会って話をする機会があるので、徐々に慣れていくことができた」と語る。

YC卒業から1年。卒業時点では5社の顧客がいたが、今では「40社近くに増えた」とアゾフェイファ氏は自信を見せる。ディープテック分野の起業家へのアドバイスを聞かれ、次のように答えた。

「起業するとき、よく一つのことに集中しろと言われます。一つのユースケースに絞って、



それで顧客を獲得してから、手を広げろと。でも僕らははじめから自分たちの機械学習サービスをさまざまな病気に応用していました。結果的にはそれが良かったと思っています。異なるケースにもすぐに対応できて、実験の切り替えが早くなり、いろんな顧客を獲得できました。だから僕からのアドバイスは、シード期ではあまりフォーカスしないで、開発したサービスが実際にどのように活用できるか、いろいろと試してみるのが良いということです」

### 15万ドルという制約の中で

アゾフェイファ氏とは対照的に、起業のアイデアのみでYCに参加したのがジュレティッチ氏だ。同氏が共同創業したアシャー・バイオセラピューティクスは、免疫細胞をターゲットとする新薬を開発中で、ガンをはじめとするさまざまな病気に有効だという。

ジュレティッチ氏は起業する前、大手製薬会社の管理職という恵まれた立場にあったが、大企業で画期的な新薬を開発することの難し



大手製薬会社のデータサイエンティストとして活躍後、2019年2月に Appregio Bio を創業し、同年のYC 夏季プログラムを卒業。



複数の大手製薬会社を経て、アイデアベースで2019年のYC 夏季プログラムに参加。その後 Asher Biotherapeutics を創業。

さを痛感し、起業を決意。自分と補完的なスキルをもつ共同創業者が見つかり、同じ志をもつチームメンバーが参画し、自分の仮説を証明できる「明確な実験のプラン」が頭の中にあり、さらにYCからの出資を得られたことが、起業を後押ししたと語る。

10週間のYCのプログラム期間中、ジュレティッチ氏を悩ませたのは、15万ドル（約1600万円）という、バイオテック企業にとってはかなり少ないYCからの出資金をどう使うかであった（2021年冬季プログラムより12万5000ドルに変更）。

「15万ドルで結果を出すには、考え方を変えないといけません。私たちにはいくつかの実験プランがありましたが、一番やりたい実験は技術的にハードルが高いのであきらめて、簡易的な実験を行いました」と同氏は打ち明ける。「完璧な実験ではなかった」が、開発中の抗体医薬品が、既存薬よりもガン治療に効く可能性があることをマウス実験で見事に証明した。

成功した実験データを携え、Demo Dayは大成功かと思われたが、そのあと「1カ月くらいは誰からもほとんど連絡がこなかった」とジ

ジュレティッチ氏。YCパートナーと相談した結果、テックVC向けと製薬会社向けでプレゼン資料を2パターン作ることにした。「私たちの資料は専門用語だらけで、一般のテック投資家には複雑すぎた」と同氏は振り返る。

次第にトラクションが改善され、目標としていた300万ドルには届かなかったものの、100万ドルというまずまずのシード資金を調達。

「YC卒業後の1年間はコロナウイルスの混乱もあって思うようにいかないことが多かった。2年目も簡単ではないと思う」と、ジュレティッチ氏は冷静に今後を見つめる。同氏は新たに社員を採用したり、プロジェクトの数を増やしたりする一方で、資金集めも続けた。その結果、最近になって社外の投資をほとん

ど行っていないバイオテック企業の説得に成功。「今後数週間以内にシリーズAを調達できる見込みです」と発表すると、ロパティン氏とアゾフェイファ氏がサムズアップ（「いいね」の意味）した。

最後にジュレティッチ氏はディープテック分野の起業家に向けて、「実験が一つうまくいかなかったからといって挫折しないこと。資金がある限り、一つの仮説についてできるだけ多くのデータを集めることが重要。すぐにあきらめてはダメ」と参加者にエールを送った。



Uri Lopatin (Uri Lopatin)、[Y Combinator](#) 客員パートナー/Pardes Biosciences 共同創業者兼 CEO。ニュージャージー州立医科歯科大学卒業。米国立衛生研究所のフェローなどを経て、ロシュ、ギリアド・サイエンシズなど大手製薬会社で研究開発部門の要職を歴任。2012年に創薬企業 Assembly Pharmaceuticals (現 Assembly Biosciences) を共同創業。スタンフォード大学のアクセラレーター「StartX」のメンターを7年間務めた後、2019年よりYCの客員パートナーに就任。2020年2月に2社目となる Pardes Biosciences を創業した。



Ivana Djuretic (Ivana Djuretic)、[Asher Bio](#) 共同創業者兼 CEO。モンテネグロ出身。ハーバード大学で博士号(免疫学)を取得。ニューヨーク大学でのポストドク研究員を経て、複数の製薬会社で新薬開発に従事。米製薬大手ファイザーではガン免疫発見担当ディレクターを務めた。2019年のYC夏季プログラムへの参加を経て、Asher Biotherapeutics (本社：サンフランシスコ) を共同創業した。Asher Bio: <https://www.asherbio.com/>



Joey Azofeifa (Joey Azofeifa)、[Arpeggio Bio](#) 創業者兼 CEO。コロラド大学ボルダー校で博士号(コンピュータ科学)を取得。製薬大手メルクのデータサイエンティストなどを経て、2019年2月に Arpeggio Bio (本社：デンバー) を創業。同社は薬が患者の体に与える影響を遺伝子レベルで自動予測するサービスを提供する。2019年にYC夏季プログラムに参加。2020年、米フォーブス誌の「30歳以下の30人(ヘルスケア部門)」に選出された。Arpeggio Bio: <https://arpeggiobiosciences.com/>

## YC Community against Pandemic

### YC 企業がパンデミックに挑む

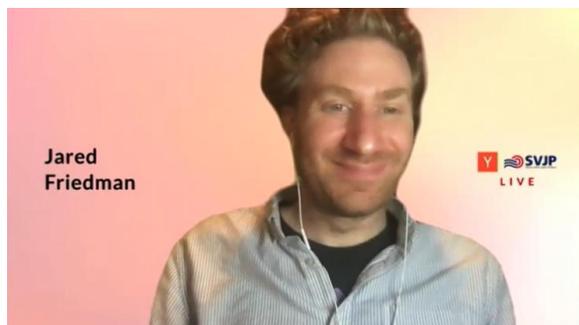
Day 2 11:45-12:30

新型コロナウイルスの脅威に対して、YCがバイオメディカル技術を保有するスタートアップを人的・財政的に支援するプロジェクトを立ち上げたことはあまり知られていない。

プロジェクトの中心的役割を担うパートナーのジャレッド・フリードマン氏、YCを今春卒業したばかりのバイオテック起業家のアーロン・モリス氏、そしてこの度2社目のバイオテック企業を立ち上げた疫学専門医のウリ・ロパティン氏（YC客員パートナー）を迎え、彼らがいかに連携し、この混乱に立ち向かっているのかについて議論が交わされた。

#### 45社以上がコロナ対策で連携

モデレーターを務めたフリードマン氏はまず、今年3～4月の2カ月間に45社以上のYC企業が



新型コロナウイルスに対抗するプロジェクトをYCでいち早く立ち上げたパートナーのフリードマン氏。

コロナ対策のプロジェクトを立ち上げたと述べ、そのうち5社の事例を紹介した。たとえば、過酸化水素を作っていた自社工場の設備を使ってハンドジェルの製造を始めたスタートアップや、3Dプリント技術を用いてフェイスシールドの生産を始めたスタートアップの例などを取り上げた。

「彼らは皆本業があるにもかかわらず、この間コロナ対策にほぼすべてのリソースを割いたのです。大企業ではなく、スタートアップだからこそ、このように迅速な意思決定ができた。これがまさにシリコンバレーの精神です」と、フリードマン氏は誇らしげに語った。

#### オープンソースの創薬プロジェクト

現在コロナウイルス対策に全力を傾けているYC企業の一つが、英国出身のモリス氏がCEOを務めるPostEra（ポスト・エラ）だ。同社は機械学習を用いて、新薬開発の初期段階における化学合成プロセスを支援するバイオテック企業である。

コロナウイルスが米国を直撃したのは、同氏が3カ月にわたるYCのプログラムをほぼ終えようとしていた時だった。資金調達を開始したわずか数日後に、カリフォルニア州で外出

禁止令が発令され、「私自身もパニックでした。資金集めを延期すべきかなど、いろんな心配がありました」と、モリス氏は振り返る。

そんなときオックスフォード大学の研究者らのツイートを偶然目にしたモリス氏は、自分たちがもつ機械学習と化学合成技術を使えば、コロナウイルスの自己複製を阻害する化合物を作れることに気づく。そしてわずか数日のうちに、チームで協力してプラットフォームとなるウェブサイトを立て上げた。

これが世界初の大規模なオープンソースの創薬プロジェクト「COVID Moonshot」である。全世界の科学者の協力を得て、特許取得なしで安価かつ迅速に大量生産できる抗ウイルス薬の開発を目指す。サイトを立ち上げると、大手製薬会社から大学の研究所、スーパーコンピュータ関連企業まで25の企業・組織がすぐに支援を表明した。現在まで410人の科学者から1万3000件以上の新薬候補となる化合物の届け出があり、提携するラボで1000以上の試験を行ったと、モリス氏は話す。

とはいえ、新薬開発の道は宝くじに例えられるほど険しい。この「COVID Moonshot」がはたして抗ウイルス薬の開発につながるかどうかは未知数だ。それでもモリス氏はプロジ



ロンドンより午前4時から参加してくれたモリス氏。



ジェクトを立ち上げた意義をこう語る。

「2002～03年のSARS（重症急性呼吸器症候群）でとても残念だったのは、事態が終息した後、ほとんどの研究や検証作業がそこで止まってしまったことです。また当時行われた一連の試験データを一元的に管理する中核的ハブもなかった。そのことが今回の新型コロナウイルスに対する対応の遅れを招きました。近い将来、また別の型のコロナウイルスが必ず生まれくるはずですが、そのときに、あらゆる詳細な研究データが蓄積されたCOVID Moonshotがあれば、世界中の研究者がすぐに動けるのです」

### 「バーチャル」なバイオテック企業

モリス氏と対照的なアプローチをとるのが、YC客員パートナーのロパティン氏だ。起業家としてB型肝炎の治療薬を開発するメディカル企業をすでにエグジットさせた同氏だが、今回2社目となるメディカル企業Pardes Biosciences（パーデス・バイオサイエンス）を立て上げた。

再び起業家となる決断を後押ししたのは、コ

「新型コロナウイルス対策の緊急性に加え、昨今の起業環境だという。「バイオテック企業の創業が今ほど容易になったことはありません。クレジットカードがあれば、自宅ですぐに起業できる時代となりました。実験は世界のどこかのラボを使ってリアルタイムに行えるのです」

ロパティン氏の目標は、新型コロナウイルス版のタミフル（経口薬）を開発することだ。

「SARSやMERS（中東呼吸器症候群）、そしてCOVID-19だけでなく、人々が毎年かかる風邪の多くが新型コロナウイルス由来です。だからこの新薬開発に成功すれば、世界で初めて、ウ

イルス性の風邪を治せるようになるのです」

驚かされるのはそのスピード感だ。自前のR&D施設を持たない「バーチャル企業」でありながら、創業からわずか2週間で最初の特許を申請。すでに新薬候補となり得る数百種類の化合物を設計したという。モリス氏とロパティン氏ともに、今後数カ月のうちに動物実験で新薬の効果を検証し、来年、臨床試験へ進みたいとする。新型コロナウイルス対策という世界的課題に対し、YC企業のしなやかかつ迅速な意思決定と行動力が光るセッションとなった。



ジャレッド・フリードマン (Jared Friedman)、Y Combinator パートナー。ハーバード大学卒業（コンピュータ科学・経済学専攻）。在学中の2005年に文書共有サービス（現在は電子書籍がメイン）のScribdを共同創業し、翌年YCプログラムに参加。その後、約9年間にわたってCTOとして同社の事業拡大を支えた。またエンジェル投資家としてCruiseやInstacartなどに出資した実績をもつ。2015年より現職。



アaron・モリス (Aaron Morris)、PostEra 共同創業者兼CEO。オックスフォード大学で修士号（応用数学）を取得。大手証券会社ゴールドマン・サックスでデータサイエンティスト兼トレーダーとして約5年間勤務した後、2019年10月にケンブリッジ大学の研究者らとPostEra（本社：ロンドン）を設立。またオープンソースの創業プロジェクト「COVID Moonshot」を立ち上げ、COVID-19に効く抗ウイルス薬の開発を目指す。  
PostEra: <https://postera.ai/>



ウリ・ロパティン (Uri Lopatin)、Y Combinator 客員パートナー／Pardes Biosciences 共同創業者兼CEO。ニュージャージー州立医科歯科大学卒業。米国立衛生研究所のフェローなどを経て、ロシュ、ギリアド・サイエンシズなど大手製薬会社で研究開発部門の要職を歴任。2012年に創業企業 Assembly Pharmaceuticals（現 Assembly Biosciences）を共同創業。スタンフォード大学のアクセラレーター「StartX」のメンターを7年間務めた後、2019年よりYCの客員パートナーに就任。2020年2月に2社目となるPardes Biosciencesを創業した。

## Keynote Session

### キーノートセッション

Day 2 14:05-14:50

起業家として成功するための条件とは何か。また会社を大きくする過程でどのような問題に直面するのか。本セッションでは、ACCESSの創業者として知られる鎌田富久氏がモデレーターを務め、ヘリオスCEOの鍵本忠尚氏とトレジャーデータ共同創業者の芳川裕誠氏が、起業の苦労や成功への道のりなどをシェアした。

#### 起業に至る経緯

鍵本氏や芳川氏のような成功した起業家は、日本ではまだごくわずかだ。鎌田氏は「起業になかなか踏み切れない人も多い」として、二人に起業家を志したきっかけを尋ねた。

医者一家の元で育ち、自身も医学の道へと進んだ鍵本氏は、研修医だった頃に重い病人を担当した体験を語った。失明して孫の顔が見

えない高齢者、ガンにかかった学生、退院後に自殺してしまった患者……。そんな患者たちを前にして「『治す方法はありません』と言い続けてよいのかと悩んだ。もはや臨床医をしていられない気持ちになった」と、自身が起業に至った想いを打ち明けた。

一方、芳川氏は米レッドハットや三井物産という大企業に勤務するサラリーマンだった。商社時代に投資担当として米シリコンバレーに赴任したことがきっかけで、何人もの成功者を身近に見る機会に恵まれた。そこで出会った人々について、「確かに賢くて人間的にも素晴らしい人たちだけど、彼らだって同じ人間であり、悩んだり失敗したりもする。彼らにできて、自分にできないはずがない」。そんな想いが募って、起業家を志すようになったという。

#### 資金調達のお考え方

起業家が必ず直面する問題が資金調達だ。研修医を辞めて起業した鍵本氏は、すぐに結果を出せずに、投資家に大損をさせてしまった手痛い経験がある。「バイオは技術的に複雑なので、何か問題が生じたときに業界外の投資家にご理解いただくのが難しかった」と同氏。そのため、2社目となるヘリオスでは、事業会



社を中心にシリーズAで30億円を調達した。

「事業会社の場合は成果を出すまでの時間的制約が少ないほか、事業面のシナジーを主に期待されているため、事業内容をしっかり見ていただけた」と述べる。

一方、芳川氏は「大きな声では言いたくないが」と前置きしつつ、「お金に『名前』が書かれてあるのがVC投資。『あの投資家がお金を入れている会社なら大丈夫だろう』というふうに安心感が広まれば、資金を集めやすくなる」と話した。

日本では黒字化したベンチャーの方が機関投資家からの評価が高いのが現実だ。この点に関して、「バイオベンチャーの意義は患者に薬を届けることにある。赤字を恐れている日本にバイオベンチャーは育たない」と鍵本氏は言い切る。そして同社が創業から赤字続きでありながらも、350億円程度の資金調達できたことに触れ、「これは米ナスダック市場に上場するバイオ企業が製品を出すまでに調達する額とほぼ同じ規模。だから日本でもやればできなくはない」という見方を示した。



渋谷 QWS スタジオで登壇する鍵本氏



芳川氏は米国よりリモート参加した。

### 人材集めのコツ

鍵本氏は「起業して一番嬉しかったこと」について聞かれると、「患者に薬を届けられたこと。今も欧米の病院で毎日、私たちの薬が患者さんに投与されている」と答えた。

芳川氏は「日本の優秀なエンジニアを世界に出す」ことをライフワークとしてきた。英アームがトレジャーデータを買収した際には、日本で働くエンジニア50人以上が1億円以上の報酬を手にしたと明らかにし、「金銭的な成功はキャリアの成功につながる。成功の喜びを仲間たちとシェアできたことが嬉しかった」と口にした。

会社を大きくする過程で重要なのが人材集めだ。芳川氏は、住んでいる国にこだわらず優秀な人間を採用し、『『この人だ』と思ったら、目が飛び出るくらいのストックオプションを渡してきた』と語る。

もっとも、ベンチャーでは人材のクビを切らなくてはならないこともある。芳川氏は自身が採用した人材を解雇した苦い経験がある。その際に、同氏が相談役の投資家に悩みを打

ち明けると、「会社を潰すのは間違った決断ではなく、遅い決断だ」というアドバイスが返ってきたという。芳川氏は「決定が正しいかどうかはわからなくても、直感を信じて動くべきだ」と述べる。

一方、鍵本氏は「バイオベンチャーは人材を比較的集めやすい」と語る。製薬業界では昨今、早期退職が相次いでおり、優秀な人材が市場にあふれているためだ。また創業間もないスタートアップの場合、「大切なのは最初の一人の採用で、その人物が業界内で名前が知られていれば、ほかの人もついてくる」と採用のコツを明かした。

### 次世代起業家へのメッセージ

これから起業家を目指す若者はどんなことを意識すべきか。そんな問いに芳川氏は「人生

はいくらでもやり直せる。自分の直感を大事にして、やりたいと思ったらまずはやること」と答える。同じ質問に対し、鍵本氏は、起業家にとって重要なのは「何のために起業するのか」という初心の深さを表す縦軸と、興味や関心の広さを表す横軸だと説明。「縦軸の初心が深い人はブレない。そして横軸で感性がおもむくままに何でもチャレンジしてほしい。それが将来になって花開く」と、参加者を勇気づけるメッセージを送った。



鎌田 富久 (Tomihisa “Tomy” Kamada)、TomyK Ltd. 代表/株式会社ACCESS 共同創業者。東京大学在学中にソフトウェア企業 ACCESS を設立。組み込み向け TCP/IP 通信ソフトや、世界初の携帯電話向けウェブブラウザなどを開発。また携帯電話向けの「Compact HTML」を W3C に提案するなど、モバイルインターネットの技術革新を牽引した。2001 年に東証マザーズに上場し（現在、東証一部）、グローバルに事業を展開。2011 年に退任。その後、スタートアップを支援する TomyK を設立し、ロボットベンチャーの SHAFT（米グーグルが買収）など多くのテック企業の立ち上げに関わってきた。著作に『テクノロジー・スタートアップが未来を創る』など。東京大学大学院理学系研究科情報科学専攻修了（理学博士）。



鍵本 忠尚 (Tadahisa Hardy TS Kagimoto)、株式会社ヘリオス 代表執行役社長 CEO。九州大学医学部卒業。九州大学病院にて眼科医として勤務した後、2005 年に大学発バイオベンチャーのアクイメンバイオフーマ（現アクイメン）を起業。BBG250 を利用した眼科手術補助剤を開発し、欧州でデファクトスタンダードの地位を獲得。2011 年に再生医療の実用化を目指し、日本網膜研究所（現ヘリオス）を設立。2015 年、東証マザーズに上場。「難治性疾患に苦しむ患者へ治癒と希望を届ける」という初心の実現に向けて、iPS 細胞技術を用いた再生・細胞医薬品という新たな産業創生に取り組んでいる。



芳川 裕誠 (Hironobu Yoshikawa)、Treasure Data Inc. 共同創業者。早稲田大学文学部在学中の 2001 年から米レッドハットに勤務。2007 年に三井物産に入社し、ソフトウェアを中心とした技術投資を担当。2009 年にシリコンバレーの事業所に転勤。2011 年、マウンテンビューにてトレジャーデータを共同創業し、CEO に就任。著名 VC などから複数回に渡り合計 5400 万ドルを調達し、売上数百億円規模にまで成長させた。2018 年、英アームに総額約 6 億ドルで同社を売却。2020 年 10 月に CEO を退任した。現在、シリコンバレー在住。

## Technology and Entrepreneurship from Japan Contributing to Our Society

### 世界を変える日本のテクノロジーとアントレプレナーシップ

Day 2 16:40-17:30

GAFAをはじめとする米国のIT大手がデジタル経済の変革をリードする中、日本企業に勝てる道は残されているのか。本イベント2日目の最終セッションでは、「日本のテクノロジーとアントレプレナーシップ（起業精神）」をテーマに、マネーフォワードCEOでシリコンバレー・ジャパン・プラットフォーム（SVJP）のエクゼクティブ・コミッティーメンバーを務める辻庸介氏による司会のもと、ユーグレナ社長の出雲充氏と慶應義塾大学医学部教授の宮田裕章氏が、日本の進むべき道について大局的な視点から議論を交わした。

#### 日本が抱える二つの課題

出雲氏はまず本セッションの議題に触れて、「日本が元気になるためにはアントレプレナーシップが重要」と主張する。経済成長に関して、「世界中の研究でアントレプレナーシップと生産性の高い相関性が明らかになっている。ところがアントレプレナーシップに関する国際的な競争力ランキングで日本は最下位だ」と指摘。どうすればこの現状を変えられるか、出雲氏は常に考えているという。

アントレプレナーシップに加えて、もう一つ日本の大きな課題がデジタル化だ。経済協力

開発機構（OECD）の国際調査によると、学校の授業でデジタル機器を利用する割合で、日本は加盟国37カ国中で最下位。宮田氏は「教育現場はデジタルを邪魔なものとして遠ざけてきた」と指摘。デジタル化は識字率と同じく、社会のベースになるものだとして、「早急に取り組まないと手遅れになる」と警鐘を鳴らした。

#### デジタルとフィジカルの両立

宮田氏はLINEを使った厚生労働省の新型コロナ全国調査を発案したことでも知られる。「コロナウイルスは伝統的な水際対策ではもはや手に負えない。まずはしっかりデータを集めて、何が起きているかを把握することで、次のビジョンが見えてくる」と、同氏は調査の





狙いを口にする。そしてヘルスケア分野でのデータの活用について、「国やIT大手だけがデータを使えるのではなく、起業家と同じステージで勝負するためにはデータを開放することが必要だ」と述べた。一方、出雲氏は、ヘルスケア分野はデジタルとフィジカルの両方のテクノロジーが求められるため「1社単体ではできない」と指摘し、シナジーを生み出すM&Aが有効だとの見方を示した。

政府のデジタル庁設置に向けた動きなど、日本でもデジタル化の推進は喫緊の課題となっている。もっとも、現状の公的機関で行われているデジタル化について、宮田氏は「単に紙でやっていた作業を電子化するだけの『デジタル化の罨』にはまっている」と問題視する。実際に求められているデジタル化とは、デジタルという選択肢をもつことで現状のあり方を改めて再設計し、より豊かな人間社会を追求することだという。

### グローバル市場での勝算

出雲氏率いるユーグレナは、今年ノーベル平和賞を受賞したことで注目を集めている国連

世界食糧計画（WFP）と事業連携し、ロヒンギャ難民の食料支援を行っている。これに関して、出雲氏は「栄養素の固まりのミドリムシ、故障しないトヨタ車、ガンを治せる薬。こうしたものは、言葉の壁を越えて、世界中の人にその価値を訴求できる」として、「グローバルに勝負するなら、英語力が大きなハンデにならない、説明不要な圧倒的強さと根源的価値を示せる分野を選ぶべきだ」との持論を述べた。

シリコンバレーのIT大手がヘルステック市場に次々に参入する中、辻氏は「このままだと日本のヘルスケア分野もGAFAに支配されてしまいかねない」と危機感を表す。宮田氏は、日本ではプラットフォームの整備やデータの取り扱いなどについて政府内でもようやく議論が始まったばかりだとして、「国だけでは限界があるので、民間企業を巻き込みながら価値あるものを作っていくべきだ」と語った。

これに対して出雲氏は、「日本に勝算は十分ある」と語り、日本が今後注力していくべき分野を二つ挙げた。一つは所得に関係なく誰にとっても大切な「健康」、そしてもう一つはコンピュータを動かす動力としての「電池」だ。出雲氏は「もし日本に、どんな病気でも治せ



る高い医療技術や、一回充電すれば一年間もつような電池があれば、世界中の人は必ずこれに對価を払うはずだ」と話した。

### 新しい「豊かさ」を作る

最後に、起業家を目指す人に対して、出雲氏は「日本にはまだ勝てるチャンスが十分ある。ミドリムシのようなビジネスでもWFPと連携し、世界の子供たちに栄養のある食料を届けるという刺激的な取り組みを実現できた。僕にできて、みなさんにできないはずがない。日本を楽しく盛り上げていける起業家を一人でも多く応援していきたい」と語った。一方、宮田氏は社会の豊かさの指標として、国内総生産（GDP）やウェルビーイング（幸福）といった概念は時代遅れになりつつあると指摘。

「自分だけでなく、社会全体をどうやって豊かにしていくか。これからは、世界とのつながりの中での多様な『豊かさ』をどのようにして生み出せるかがポイントになる。それが新しい価値になり、世界を変えるビジネスにもなる」と締めくくった。

今後日本が世界に存在感を示していく上で、日本の起業家がこうした「新しい問いを立てる力」をいかに育めるかが鍵となる。



辻 庸介 (Yosuke Tsuji)、株式会社マネーフォワード 代表取締役社長 CEO/SVJP エグゼクティブ・コミッティーメンバー。ソニー、マネックス証券を経て、2012年にマネーフォワードを設立。お金の見える化サービス「マネーフォワードME」やバックオフィス SaaS「マネーフォワードクラウド」などを提供し、2017年に東証マザーズに上場。2016年、Forbes Japan「日本のベスト起業家ランキング」を2年連続受賞。2018年に「第4回日本ベンチャー大賞」にて審査委員会特別賞受賞。新経済連盟幹事も務める。京都大学農学部卒業。ペンシルバニア大学ウォートン校でMBA取得。



出雲 充 (Mitsuru Izumo)、株式会社ユーグレナ 代表取締役社長。駒場東邦中・高等学校、東京大学農学部卒業後、2002年東京三菱銀行入行。2005年株式会社ユーグレナを創業、代表取締役社長就任。同年12月に、世界でも初となる微細藻類ミドリムシ（学名：ユーグレナ）の食用屋外大量培養に成功。世界経済フォーラム（ダボス会議）、ヤンググローバルリーダーズ、第一回日本ベンチャー大賞「内閣総理大臣賞」受賞。経団連審議委員会副議長。著書に『僕はミドリムシで世界を救うことに決めた。』（小学館新書）がある。



宮田 裕章 (Hiroaki Miyata)、慶應義塾大学 医学部 教授。東京大学大学院で保健学博士（論文）を取得。同大学院医学系研究科教授を経て、2015年より慶應義塾大学医学部医療政策・管理学教授を務める。データサイエンスなどの科学を駆使して社会変革に挑戦し、現実をより良くするための貢献を軸に研究活動を行う。また専門医制度と連携し5000病院が参加する「National Clinical Database」、LINEと厚労省の新型コロナ全国調査など、医学領域以外にも含むさまざまなプロジェクトに取り組む。

# 協賛・協力

## プラチナスポンサー

**APAMAN**      *fabbit*

## ゴールドスポンサー



## 協力



KYOTO UNIVERSITY



Keio University



FOUNDX



WASEDA University

Photos: Ko Sasaki

Text: Yasushi Masutani, Tetsuya Katano

Event Organizers: Y Combinator, Silicon Valley Japan Platform

